

後記

このたび、添谷芳秀先生の三二年におよぶ塾への多大なご貢献を記念し、ご退職記念号が刊行されるはこびとなった。塾法学部のご同僚として添谷先生と親交の深かった西野純也先生、磯崎敦仁先生に加え、学部・大学院時代に先生にご指導頂いた博士号取得者一三名と取得間近の二名の添谷門下生から寄稿して頂くことが出来たことは喜ばしい限りである。関係者の皆様には心より感謝申し上げます。

私は、大学院ゼミ一期生として、添谷門下の中では最も早い時期に博士号を取得したというご縁で本号の発起人を務め、後記を書かせて頂くこととなった。添谷先生の豊富なご業績や知的交流活動の詳細については、本号所収の主要業績リストと岩谷十郎学部長の序文にお譲りし、ここでは、ゼミなどでの個人的な思い出について書かせて頂きたい。

学部・大学院ゼミを通して添谷先生は一貫して、学生の自主性を重んじつつ、自由には責任が伴うということを教えられたように思う。学部ゼミでは毎週、一―二冊の課題文献を読み込んでブックレポートを書くという課題があり、

先生は毎週必ず丁寧にレポートに赤字でコメントを書き込んで返却くださった。そうした中で先生は、主張や結論の前に分析枠組の重要性を強調された。

先生は学生との懇親の場も大事にしてくださった。一気飲みと喫煙の禁止が添谷ゼミの飲み会のルール。常識と礼節を持ちつつ楽しい時間を過ごす術を教えていただいた。山手線ゲームで先生にお題をお願いしたら出てきたのが「戦後日本の外相の名前」。一気にゼミ生の酔いが醒めたのは言うまでもない。ゼミ合宿の余暇の時間や、法学部ゼミナール委員会主催ソフトボール大会では、学生時代からスポーツ万能の先生が「四番サード」の定位置を手放さず、勝負にこだわる姿勢を示されたのも良い思い出である。

添谷先生は、ゼミ卒業生のネットワークを大切に、海外をご訪問される際には、SNSなどを通じて「誰かいますか」と声を掛けてくださる。毎年開かれる同窓会に加え、世界各地で「プチ同窓会」が開かれるのも、国際政治がテーマの添谷ゼミならではのだろう。

大学院ゼミでは、韓国、中国、台湾、タイ、チリ、ギリシャ、オーストラリアなど多様な国々からの数多くの留学生と共に学ぶ機会に恵まれた。添谷先生はこれらの留学生のことをとりわけ気かけ、きめ細かにご指導されていた

ように思う。あるとき先生が、ミシガン大学大学院で学位を取得された際に指導教授から大変感動的なご指導を受けた、としみじみと話されたことがある。そして、そのご恩をご自身の指導を通して返されているのだとおっしゃった。自分も留学生を指導するようになり、改めて先生から学ぶところが多いと痛感している。

添谷先生が三田にいらっしやらないという事実がいまだに信じられず、寂しい思いが胸にこみあげる。しかし、先生はご退職後もこれまでと変わらず、研究・知的交流活動などを活発にリードされ、お忙しい日々を過ごされている。我々弟子たちは、これからも先生の背中を見ながら多くのことを学んでいくだろう。先生がご健康に留意され、今後益々ご活躍されることを、心からお祈り申し上げる次第である。

二〇二〇年十二月

国際センター講師 昇 亜美子